

書評

芳賀徹著『外交官の文章——もう一つの近代日本比較文化史』 『外交官の文章』をめぐる架空の対談

稲賀繁美

はじめに

本書の著者である比較文学者の芳賀徹氏（東京大学名誉教授）は、令和二年二月二十日に逝去されました。芳賀氏には、明治神宮責任役員・総代、同崇教会副会長として、長きにわたり多大な尽瘁をいただきました。謹んで哀悼の意を表します。

本書は、攘夷・開国から日清・日露の戦役を経て開戦まで、国内外の外交官が遺した日記や回想をもとに時代を読み解いた比較文化史で、著者の遺作となりました。東京大学の比較文学比較文化専攻で芳賀氏の薫陶を得た、稲賀繁美氏（国際日本文化研究センター教授）に追悼の書評を寄せていただきましたので、ここに紹介します。

なお、本書の目次は以下のとおりです。

（『神園』編集部）

- | | |
|------|--|
| 第一章 | 「攘夷」のなかの日本発見——ラザフォード・オール
コック『大君の都』 |
| 第二章 | 暁窓残燭の下に——栗本鋤雲『艶庵遺稿』他 |
| 第三章 | 文学としての幕末外交回想記——田辺太一、福地源
一郎、栗本鋤雲 |
| 第四章 | 岩倉使節団と日本の近代化——久米邦武編述『特命
全権大使米欧回覧実記』 |
| 第五章 | 清国外交官の見た明治日本——黄遵憲『日本雜事詩』 |
| 第六章 | 幕末洋学から日英同盟締結へ——林董『後は昔の記』 |
| 第七章 | 明治外交の危機に立つ——陸奥宗光『蹇蹇録』 |
| 第八章 | 日露戦争の暗鬱——小村寿太郎 |
| 第九章 | フランスからの詩人大使——ポール・クロードル |
| 第十章 | 孤立と国際協調——幣原喜重郎 |
| 第十一章 | 「愛する女が狂つてゆく」——ジョージ・サンソム |
| 第十二章 | 大戦前夜の駐英大使——吉田茂と妻雪子 |

S 本書は、『大君の使節―幕末日本人の西欧体験―』（中公新書、一九六八年）の遙かなる続編ですね。

T あれは一九六〇年代中頃、『国際文化』に連載。「近代日本比較文化史」がその時の副題。だから今回は「もう一つの」と付けたわけだな。

S 今回の単著の元となったのは『外交フォーラム』の連載（一九九三年一月―一九九五年九月）。粕谷一希さんの存在が無視できません。また単行本化は、筑摩書房の湯原法史さんに会う度に「今年こそ出します」が十年以上繰り返し。半世紀を跨いで繋がった「大事業」ですが、その発端を記したのは「非西欧世界の『西欧化』運動」あたりでしょうか？

T この論文は、副題が「夷狄の国の冒険者たち」。亀井俊介編の『現代比較文学の展望』（研究社出版、一九七二年）に載っている。『大君の使節』の新書刊行が成って、やっと航路図が定まった、というところかな。あれ？ ボクは手書きだから知らんが「夷狄」という熟語は、最近のワープロでは出ないようだな。

S 冒頭に杉田玄白や前野良沢が登場して、彼らの心境が「誠に艱難なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋としを再発見したような。

T ほかでもないドナルド・キーンの『日本人の西洋発見』だが、これはキーンさん自身の「日本発見」と合わせ鏡かもしれない。『外交官の文章』にも登場するジョージ・サンソム卿にも『西欧世界と日本』がある。これもサンソム自身の「日本発見」の裏打ちがあつて、日本の歴史を世界のなかに位置付ける視野の広がり、外交官ならではのもの。国文や国史とは別世界だ。

S その視点に「比較」という術語を当て嵌めるのは、今になってみて、どうでしょうか。体験の相互照射は大切。ところが昨今言われる global history は、そうした体験の切実さを忘れて、世界史をまた別の仕方で平板均一に均してしまふ危険を含んでいるようです。

T 国際法の尊重というが、これ自体、西側世界が作り、全世界に押し付けた規則だ。だが日清・日露の和平交渉を見ても、李鴻章にせよ袁世凱にせよ、清国側の「中華意識」は、付け刃の西洋流「国際法」に安易には乗ってこない。そのしたたかさが、速記録からは如実に見えてくる。

2

S 日本の再独立前後に海外体験をした若い世代には、渡辺崋山や高野長英の西洋への知識欲、吉田松陰の渡海の夢

て寄るべなく」と、あります。蘭語からの『解体新書』の訳出という「冒険」は海図なき船旅だった。それが「そのまま今日の若い比較文学徒」の感慨に重なっていた。

T 当時のフランス派の比較文学でも欧州文人の東方旅行は扱われていた。その後一九七〇年代末にエドワード・サイードの『オリエンタリズム』が出るが、あれは欧州からの東方趣味を植民地側エジプトから見返す切り返しだね。

S そしてそれは十九世紀後半の日本人の意識にも通じるものだった。このあたりはパンカジ・ミシュラの『アジア復興』（園部哲訳、白水社、二〇一四年）が見事な鳥瞰を与えています。アフガーニー、梁啓超にタゴールが主人公ですが、福澤諭吉や岡倉覚三、夏目漱石も登場して、当時の東洋人知識人の知的世界の中に、見事に位置づけられている。英語圏思想史の傑作ですが、その文脈で読むと、本書『外交官の文章』もさらに精彩を放ちます。

T 非西欧人の側の西洋体験というのが、global な世界経験の総体のなかで見落とされてはならないはずなのに、それを世界史的な視野で横に繋いで検討する作業は、ひどく遅れてきた。そのなかでも、日本の場合はひとつの範例、特異な試金石として、世界史的に価値がある。

S そしてそれは、敗戦後、占領を脱して欧米を見聞した最初の世代の世界経験とも重なるわけですね。自分の先祖を、我が身で追体験した面もあるようです。それは鷗外の『独逸日記』、荷風の『アメリカ物語』『フランス物語』から、安岡章太郎の『アメリカ感情旅行』、小田実の『なんでもみてやろう』にまで続く、官民を包含した日本人の外交的経験の「系譜」をなしている。

T 安岡や小田も、突然変異ではない。そしてこれらの実録は「文学史」という枠組みに押し込められた。けれどもそれに勝るとも劣らない体験が、文久遣欧使節団から久米邦武の『米欧回覧実記』、さらには代々の外交官 diplomats や海外に派遣された軍人の残した文業に蓄積されている。

S 軍人の場合、島田謹二さんの『ロシアにおける広瀬武夫』や『アメリカにおける秋山真之』が先鞭をつけた一次史料立脚の読み物ですね。

T 敗戦後の軍隊忌避もあつて、文学研究は、こうした貴重な題材をことごとく無視してきた。「官」は文学から外せ、という「文弱」意識かな？ 加えて歴史家は、国史、西洋史どちら側も閉鎖的で、両者を繋ぐ掛け橋となる「外交」史料に正当な価値を認めようとしてこなかった。

S 六〇年代「進歩派」から見れば、蘭学者は徳川封建体制の打破には貢献しなかったし、岩倉使節団は明治軍閥体制・絶対主義立憲君主制確立に向けた体制側の情報収集に過ぎない。それは人民の歴史の封殺であり、民衆史の敵

だった。

T 福地源一郎が横須賀造船所を創ったレオンス・ヴェルニーにフランスで初めて会った時の印象を残している(『外交官の文章』四七頁(以下、同じ))。最初は、当時弱冠二十八年歳の青年に不安を覚えたものの、その技量にやがて感服・賛嘆する。だが殖産興業の技術移転、制度移入史は、「自由民権」の「歴史学」から放逐された。東大工学部だつてグラスゴー留学組の「長州」なしにはありえない(一三三頁)。

S 服部之絵の『黒船前後』(大畑書店、一九三三年)は別格ですが、このあたり、著者がフランスで技術畑の技師の工場視察に通訳としてかり出された経験も重ね合わせになつていますね。「日野ヂーゼル」派遣団の件が本書にも登場します(六一頁)。

T 『米欧回覧実記』が詳細に活写する現場の生々しい遣り取りの生態は、「技術史」や「法制史」の概論的記述からは、なかなか見えてこない。特定の discipline の枠組みから時代を遡って整理しても、どうも現場の丁々発止たる交渉の実況が掴めない。「外交史」や「国際関係論」も大切だが、著者に言わせれば、こちらは史料の料理の仕方が「詭え向き」。単調で、型に嵌つて了見が狭い……。

S 既存の学問分野では取り零される「旨味」を拾って堪

T 当事者双方の言い分を丁寧に突き合わせて、なぜ齟齬や食い違い、見解の対立が生じたのかをじっくり見極めた。そうした比較吟味のためには、世論やマスコミの動向への目配りも不可欠だ。「外交官の文章」は、そうした人生難事の教訓を汲むのに、絶好の生きた教材だろう。

S 『蹇蹇録』は単なる等高線の外交測量図ではなく、同時代外交の「山容水態の真面目」をとらえた「写生絵画」つまり、本来の意味の「文学ともなりえた」(一七二頁)というわけですね。

T 「蟻穴或いは長堤を壊る」。陸奥宗光の述懐だが、修羅場では想定外の椿事が嘗々と築いた策を一瞬にして水泡に帰せしめかねない。そうした活劇の現場が「外交」と呼ばれる舞台になる。しかもそこから得られる教訓は、権謀術策への戒めだ。なのにこれが歴史学の論文からは蒸発する。S 幣原喜重郎の慶応義塾大学での講演ですね(三三八頁)。

3

S オールコックの『大君の都』には、漂流民で通訳に雇った伝吉が、白昼刺殺される現場の実録描写があります(二五頁)。通訳も命がけ。そして外交官も、異文化の狭間に命を懸けていた。

T そのオールコックが、徳川の平和の余滴を満喫し、そ

能させ、現場の教訓を蘇生させる試みが本書『外交官の文章』の醍醐味でしょうか。「詩心」に欠けた「愚鈍な歴史学者、社会学者」への痛烈な批判も見えますが(二八九頁)。

T 歴史とりわけ外交史は出来合いのイデオロギーの図式にそつて描いたのでは、片務的で嘘になる。それから現在の検定教科書のように、中立な無色無臭の「事実」の集積という虚構の体裁も、歴史の「教育」には結びつかない。それだから歴史が「暗記物」になつて死んでしまう。

S といつて俗受けする講談調の美談や「語り物」に逆戻りするものも、困りますね。「お涙頂戴」も安易な読者誘導・洗脳装置に成りかねない。

T 残された「証言」には現場目撃者ならではの視点が保存されている。それらを縦横に相互照射させると、現場の遣り取りが立体的に立ち上がり、背後に潜む関係者の利害や人脈も見えてくる。

S そうした生きた繋がりがみえてくると、歴史は俄然、生動してきますね。固有名詞学習は、脳髓にそうした連鎖反応が次々と点滅するようにするための準備。だから人生経験を積みれば積むほど、過去の歴史が蘇生してくる。年齢を重ねると、縁遠かつた先人の事績や、理解しがたかつた愚行の作因にも、合点がゆくようになる。

の崩壊を惜しむ感慨すら披瀝する。

S オールコックは一八七八年のパリ万国博までには、ウイリアム・モリス派の中世主義に転向していて、日本の美術工藝を賛美しますね。

T その傍らで、崩壊寸前の徳川幕府は、横須賀造船所を薩長藩閥勢力への置き土産にする。

S 栗本鋤雲の『暁窓追録』には、軍艦奉行となつた上野介、小栗忠順の才気煥発、外交担当の颯爽とした活躍の様子も活写されています。

T 田辺茂一『幕末外交談』も小栗の「自信自信」の程を見せつける絶品の逸話を漏らさない。

S それに続くのが「岩倉使節」ですが、聖徳記念絵画館の壁画《岩倉大使欧米派遣》(山口蓬春画)を静岡県立美術館に借りだそうと芳賀徹館長が言い出して、現場は大変だつたそうですね。木下直之さんから聞きました。

T 本書のラッパーの表紙の作品だが、群青の色彩が明治の船出に相応しい。今なら氷川丸が停泊しているメリケン波止場が、その舞台だな。

S 岩倉使節団についてはNHK市民大学講座での連続放映もありました(一九八二―八四年)。話題は毎回盛沢山。

T 講師がまだテレビ慣れしてなくて、訥弁の講義が危なっかしく、だけど却って目が醒めた。『米欧回覧実記』

の一節を引けば、それで一時間の講演が自在という、闊達な番組だった。

S ここで「マテリアリスト久米邦武」というのも、唯物史観の「虚妄」への当て擦りですね。

T 北米大陸横断鉄道も、できたばかりだが、一行は例の「ララミー牧場」も通過した(七四頁)。

S 東海岸に近づくと「東方繁庶ノ域ニ達セントス、車廂穩カナルモ、輻輪ノ猶洪キヲ覚フナリ」。本書ではこの一節から、日本海海戦、秋山真之の大本営宛の打電が連想されています。

T 「本艦隊ハ直チニ出動、コレヲ撃滅セントス、本日天気晴朗ナレド、波高シ」(七五頁)。たしかにここには、両者あい通じる「領略」の精神が横溢している。海軍通だった島田教授は、ここに明治文学の金字塔を見出したわけだ。

S その島田謹二から、敗戦直後の食料不足の空腹のなかで、上田敏訳ダヌンチオ「燕の歌」の「弥生ついたち、はつ燕」やロセツテイの「いざぐちづけむ君が面」の耽美派ロマン主義を習ったのが、著者ら戦後最後の一高生……(二四三頁)。

T 耽美な文学の世界と、日露戦争期の厭戦気分とは、同時代の表裏をなす両輪の出来事だった。

S 『外交官の文章』はその振幅を埋めつつ「領略」し、す。当時は筆談による社交、外交が盛んで、旧高崎藩主・大河内輝聲はじめ漢詩に心得ある日本人が頻繁に訪れる。T 実藤恵秀ほかの東洋文庫本日本語訳には日常口語体のルビが振ってある。漢語世界で日本風物を描く際の落差が見事に視覚化され、便利だ(一一四頁)。そして、その次の世代が李鴻章となる。

S 李鴻章と伊藤の下関条約での遣り取りも興味津々ですね。伊藤の台湾割譲要求に李が“you are too hungry”と返したという(二〇一頁)。それより前の遣欧使節時代、久米邦武がその英語口訳の流暢さに感嘆したのは林董^{なだ}。林の『後は昔の記』ほかを見ると、マンチエスターで麗人に同席させられた木戸孝允を見て、伊藤博文らしい「副使」がホストに“he is ashamed”と説明したらしい(一一五頁)。「羞恥心」の意味は、“He looks shy”のつもりでしょうが、英語で ashamed では、まったく意味が違って、先方女性に対して失礼千万。

T 敗戦後のルース・ベネディクト Ruth Benedict の『菊と刀』にもつながりそうな話題だな。「恥ずかしい」は ashamed かね? 西洋語の「恥」shame には宗教的な倫理観も伴うから、意思疎通は面倒だね。

S この逸話を伝える林は「天保老人」を腐しています(一三五頁)、本人もなかなか豪傑だったようですね。吉田

「文学」の領分をより豊かにする企てですね。そういえば連載中の頃、芳賀先生はちょうど「日韓新協定調印始末」を読んでいて、伊藤博文の高宗への「桐喝」など「いや、酷いもんだ」などと韓国や中国の学生にも、漏らしていました(二五三頁)。

T その同じ頃、北京では小村寿太郎が袁世凱と談判していた。日本側の要求に呆れた袁が、ロシアが煙草二本くすねたのに怒って日本は箱ごと持ち去った、と風論し、一同「呵々大笑」したと『日清交渉談判筆記』にある(二五三―四頁)。これが「歴史の現場」ではないのかね?

S いわゆる「二一条」案件(中国側の名称)ですね。これには近年、奈良岡聰智さんの『対華二十一カ条要求とは何だったのか』(名古屋大学出版会、二〇一五年)が出ました。加藤高明と「幣原外交」については、評価と酷評とがあり、専門家の判定もまだ定まりません。

T 加藤高明は能楽などにも詳しく、マリー・ストープス Mary Stopes や桜井鏡二らとの関係も、面白い話題だろう。

4 S 『米欧回覧実記』に清朝で匹敵するのが黄遵憲『日本国志』四〇卷(二八八七年)でしょうか。客家^{ハツカ}出の黄には『日本雑事詩』もあり、本書はこちらに焦点を当てていま

茂の談によれば、松方幸次郎に、どうせそのうち破産するのだから、それまでにお国のために絵でも買っておけていつて、それが松方コレクションの「起源」になったとか。T 外交官試験世代の到来とともに、壮士風が官僚へと変質していった、という説(二三六頁)に、本書の多くの新聞書評が注目したようだね。

S そんななかで林は「日英同盟の真相」を『時事新報』に掲載しようとして、差し止めや発売禁止を喰らいます(二四三頁)。明治二十八(一八九五)年筆の『蹇蹇録』も、陸奥が「隱晦に付するを得ざる」(二二頁)と述べた文書なのに、これも昭和四(一九二九)年まで外務省では「秘密書」扱い(一七八頁)。

T 官僚組織は、内部の前任者の非は認めず、相互連絡の齟齬は極力表沙汰にせぬ性癖がある。

S そうした中『蹇蹇録』はゴードン・バーガーの手で、見事に英訳もされています(二五六頁)。
T 『米欧回覧実記』もマーティン・コルカットさんが苦心の英訳で抄訳しているけど、久米の漢語表現を機敏な英語にするのは難物だね。

5 S 近代日本の、大陸侵出について、一次史料を追う限り、

「征韓論」から一貫した半島さらには満洲に至る「侵略」意図は、立証不能で無理、というのが、本書の基本的立場ですね（一八一頁）。

ちなみに、知る人こそ少ないのですが、ニューヨークのセントラル・パークの自然誌博物館のエントランス・ホールにはセオドア・ローズベルトの事績を記念する大壁画が一九三七年に描かれます。パナマ運河開削、大統領のアフリカでのサファリー（その獲物の剥製が博物館に展示）と並んで、ポーツマス条約交渉の壁面があり、ロシアのウィツテヤローゼンの横に、小柄な小村寿太郎が彼より偉そうな高平小五郎と並んでいて、背景上部にはロシアと大和の建國神話が描かれています。映画 *The Night in the Museum* の準主役が、この辣腕帝国主義者大統領ローズベルトでしたね。

T 日露戦争後のハリマン協定破棄には、ポーツマスから戻ったばかりの小村寿太郎が超人的な働きを見せた。当時、南満洲鉄道を経営するような財力が日本政府になかったのは明らかだろう。だが清朝側から見れば一八七四年の江華島事件は、すぐにも間島問題に飛び火する。でもこの理屈は、日本側から見たのでは分からない。

S 「耶蘇教国以外の国土には欧洲的の文明棲息する能はず」（一九〇頁）との認識が欧米側に牢固としてあると陸奥ローレルの富士をほめる文章が翻訳して引いてあるが（二九二頁）、長い見事な自然情景の叙述の末に、霊峰富士が現れる。これはバスカルの有名な「無限の空間の沈黙が我を怯えさす」*Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraye* と同様の修辭。まあ間違いなくこちらは、「前田陽一先生」仕込みの読解だろう。

S また自称「野蛮人」のクローデルは日本に *l'humidité de l'âme*（二九五頁）を見出し、著者はそれを「魂のうるおい」と訳しています。

T 和辻哲郎が日本の風土や神道を語って「しめやか」という形容詞を好んで使うが、英訳すると、*soft and serene with moisture* といったところかな。湿潤な大気の育む「秋津洲」の感性にフランスの詩人が感応していた様子も彷彿とするね。

6

S 本書は一二章からなり、各章には緩やかに話題や登場人物に繋がりますが、無理に一貫した通史という体裁にはしていません。

T 海軍軍人では、堀悌吉なども傑物だが、「大分県先哲叢書」などで、すでに別に扱ってある。

S 「藝術の国日本」の最後にもちよつと言及があります

は知っていた。けれど一九三〇年代に日本に来て、それが日本には当て嵌らないとの見識を示したのが、日本に長期滞在したサンソム卿夫人、キャサリン・サンソムでした。T サンソム夫人の『東京に暮す』（大久保美春訳、岩波文庫、一九九四年）は読んでいて、実に気持ちがいい。

S 夫君は同時代の「新体制」下の日本を見て「愛する女が狂ってゆく」と矢代幸雄に向かって吐露していましたが。その前の大正期に滞在できたのがフランスの「詩人大使」ポール・クローデル。本書は建築家のアントニン・レーモンド・ナオミ夫妻との交友にも触れている（二六六頁）。

T クローデルが『百扇帖』におさめた「短唱」は、当時ハイカイばかりのフランスにあっても、異文化交流の見事な達成だね（二七二頁）。富田溪仙との水入らずの交友は、著者の言うところの「画文交響」の実例として珍重すべきものだろう。

S パリで一昨年、著者はクローデル記念の国際講演・シンポジウムを日本文化会館で実現しましたが、これが最後の欧州滞在となりました。実はその前にドクターストップで派遣が中止になったときには、急遽、当方に代役を務めろとのお達しもあったのですが。

T 著者には自分が外交官だったら、クローデルのような振る舞いできたとの自信もあったのだろう。ちなみにクね。堀の友人だった山本五十六のワシントン勤務時の痕跡を公文書館で探せ、と著者から言いつかったこともあるのですが（二〇〇六年）、これは、当方が粗忽ものにて、果たせませんでした。「アメリカ人の今日まで変わらぬ楽天的独善主義」（九五頁）とか、北米氣質への言及には、著者の北米体験の裏打ちがありますね。「アメリカ人」には「自らの発意で」自国の欠点を「矯正してゆく自浄能力がある」（三二七頁）とのブライス発言も幣原が聴いている。

反対に陸奥宗光の言う、日本人が「外地」で披瀝する悪癖、「驕慢人を凌ぐの挙動」（二六五頁）などは、今も同じですね。青木周蔵は、夫人エリザベータが著名ですが、本書では周蔵に外務省内部で毀譽褒貶のあったことが分かります。

T 吉田茂も、鴨緑江すぐ北の安東の領事に任じられて、朝鮮側の物資や武器密輸の取り締まりが「緩慢」と朝鮮総督側を公然と批判して、山縣伊三郎朝鮮総督を怒らせているな（三八七頁）。

S 鴨緑江を挟んで日本の出先同士は頻繁に、相手に咎と責任とを押し付け合っていたようです。

本書には西園寺公望の手足となって活躍した秘書の原田熊雄も登場しますが（三七〇頁）、画家の原田直次郎の甥ですな？

T 直次郎は鷗外の親友だが、父の一道は旗本で、幕末使節団の随行者。鷗外とは育ちが違った。エクステルによる肖像をヴォルフガング・シャモニーさんが再発見したね。ユーバー・ゼーの美術館にある。

S 数年前、神奈川県立近代美術館で記念展があつて、芳賀氏が酒井忠康さんと談笑している写真もあります。記念シンポジウムでは当方も発表をしましたが、折から来日中のシャモニーさんにも出演いただきました。「絵画の領分」で《ドイツの少女》のモデルを「閨秀画家」ツェチーリエ・グラーフと推定した説には、賛否両論ありますが、これもパリ留学時代の追憶の反映でしょうか……

ここで最後に「女性論」ですが、本書には外交官夫人もよく登場しますね。

T フェミニストには *history* は男性だからけしからんという筋もあるが、幣原喜重郎は自分の名前の綴り間違いを北米の記者に指摘されて、自分は *Hedehara*、家内なら *Sheehara* で願う、と切り返した(三三二頁)。それ位の機転と才知が外交には必要だ。「内助の功」も、今では使用禁止用語らしいが、こういう言葉狩りはどうなのかね。

S ここに誤植があつて“*When you refer*”ですね。細かいことですが訂正しておきます。

T 本居宣長『ういやまふみ』のほかに桂川甫周の娘、今

泉みね『名ごりの夢』(四二頁)などは、著者のお好み。陸奥宗光の「お亮どの」あて書簡(二五三―四頁)のひらがな書きの人情も捨てがたい。サンソムや吉田茂を理解するには、連れ合いとの親密な遣り取りが、なにより大切だね。

S 吉田茂の夫人・吉田雪子論は、著者の生前最後の公開講演になりました。(JFSS『日本政略研究フォーラム季報』八三号「二〇二〇年一月」に掲載)。本書を補つてあまりある「遺言」です。是非ご覧を。

T 著者は、日米開戦を待つことなく雪子が没したことを、辛せだつたと、漏らしているね(四一四頁)。

S 芳賀夫人・知子さんの追憶が重ね合わせになつていて様に読みました。これが、生前ご自身で校正まで漕ぎつけた、最後の著作となりました。ご子息、芳賀満さんによる「あとがき」も必読ですね。「父にておはせし人」。新井白石『折たく柴の記』の文句ですが、亡き父上に勝るとも劣らない、歴史に残る名文だと思います。こちらもぜひご一読を。

(令和二年九月二十日「収録」)

かみ
その
神園
〔第二十五号〕

令和三年五月三日発行

編集兼
発行者

明治神宮国際神道文化研究所

東京都渋谷区代々木神園町一番一号

電話 〇三(三三七九) 九三三八

FAX 〇三(三三七九) 九三七四

制作 株式会社 錦 正 社

東京都新宿区早稲田鶴巻町五四四一六

電話 〇三(五二六二) 二八九一

FAX 〇三(五二六二) 二八九二

〒162-0041